

高市早苗首相はなぜ支持率が高いのか。周囲の30、40歳の男女に聞いてみた。「はっきり言い切る言葉がいい」「外交でフ렌ドリーに振る舞っている」「おじさんの首相とは印象が違う」。大体こんな意見だった。

自営業や銀行員、メーカー勤務で、いずれも子育て世代。普段は仕事や家事、趣味で忙しい。SNSやネットのニュースで首相の人物に好感を持っていた。

脳科学者の茂木健一郎氏はチューブ番組で「真面目にやっている態度」が支持される理由だと解説した。「馬車馬のように働く」といった言葉や午前3時からの勉強会を挙げた。政策とは別問題だという。

その首相が衆院解散の勝負に出た。「高市早苗が首相で良いのかどうか国民に決めていただく」と訴えた。日本経済新聞社の世論調査で内閣支持率が75%という人気への自信がにじむ。

2026年度予算案の成立は後回しになった。野党や有識者は「政策優先の従来の説明と矛盾する」「予算執行が遅れる」と批判する。首相はそんな指摘が自らの支持層には響かないと高をくくっているのか。

高市氏人気と「情動の政治」

風見鶏



高市首相は減税派が「ラスボス」と呼んだ宮沢税調会長を交代させた

内閣支持率は若い世代ほど高い。支持理由は「人柄を信頼」が「政策がよい」などを上回りトップだ。

若者の消費文化論を専門とするニッセイ基礎研究所の広瀬涼研究員は「若い世代にとって政治との主な接点はSNSだ」と話す。

「そこで人柄や一生懸命取り組んでいるように見える姿が評価されやすい」と語る。「高市氏に好意を持つ若者ほど、批判的な投稿や強い言葉に対し『かわいそうだ』と擁護的な感情を抱きやすい」

論理より情動の政治だとしたら、政策にはどんな影響が出るのか。

首相は衆院選で「責任ある積極財政」の審判を仰ぐと説明した。「重要政策の

大転換だ」とも強調した。

SNS上では岸田文雄、石破茂両政権を「緊縮財政」と批判する投稿が目立つ。首相はネット世論に応える変革の指導者として振る舞っているようにみえる。

実態はどうか。かつて一般会計で10兆円を超える経済対策は大震災や経済危機のときだけだった。新型コロナウイルス禍の収束後は10兆円超が続く。

財務省幹部に言わせれば「コロナ禍以降ずっと積極財政だ。高市政権で劇的に変わったわけではない」。岸田、石破、高市3政権はいずれも「経済あつての財政」を掲げた。路線転換というよりは程度の差だろう。所得税がかかり始める「年収の壁」も同じだ。首相が決めた178万円への引き上げに必要なのは6500億円程度。1年前の石破政権では「壁」を103万円から160万円に上げており、減税規模は1.2兆円だ。今回以上に大盤振る舞いした記憶は薄れがちだ。首相は総裁に就任した直後、減税派が「ラスボス」と呼んだ宮沢洋一税調会長を交代させた。わざわざSNSに「財務省出身の税の専門家だけで固めない」と投稿した。

実のところ、年収の壁の引き上げを最初に決めたのは宮沢氏だ。その事実は見過ごされ、「増税派」を外したイメージが残る。首相は長期金利が上昇すると、一転して市場関係者に向け「責任ある積極財政は無責任な国債発行や減税ではない」と説いた。「財政への責任」と「積極財政」を場面で使い分けてはいないか。

衆院選では食料品の消費税を2年間ゼロにするとか公約した。財源は示していない。詳しく検証されないと見ているのかもしれない。突然の解散で国会論戦はなくなった。短期集中の選挙戦だが、印象論ではなく事実を深掘りしてほしい。

(秋山裕之)